

異文化におけるコミュニケーション能力と適応 — ソーシャル・スキル研究の動向 —

田 中 共 子

留学生は、異文化で教育を受けて言語能力を身に着けると同時に、その会社での行動様式を理解し身につけていく。どんな場面で、どんな事を、どのように言えばいいのかを判断し、学習した語意や文法を用いてそれを表現し、また相手の用いる表現の意図を理解しようとする。また、言語に加えて、表情や身ぶりなどの非言語的な方法も活用して、実際に生きたコミュニケーションを行う。すなわち、習得した語学力を適切に運用して、対人関係を発展させて行くためには、状況やふさわしい振る舞いの判断といった、社会的行動様式の学習もまた必要と思われる。それは言語の応用力を身につけるための、効果的なアプローチともいえよう。

その社会における行動の様式で、特に対人関係の成立・維持・発展に関するもの、すなわち成功する対人的なコミュニケーションの方法は、ソーシャル・スキル（社会的技能）とよばれている。それは、誤解のない相互理解を行い、相手から好意的な反応を引き出し、不快な反応を避け、建設的な対人関係を築くための、コミュニケーションの技術を意味する。そうした対人行動の様式には、文化による違いがみられる。それは、他国でのコミュニケーションが、いかに文法的に正確な言葉を用いようとも、結果的に状況にふさわしくない行動をとればコミュニケーションとしては不適切となってしまう危険性を示唆している。

言語教育の分野でも、状況に合わせたコミュニケーションの技能に注目したものが見られる。たとえば、鶴田ら（1988）の「英語のソーシャルスキル」は、状況に合った適切な英語表現に焦点をあわせ、会話の内容によって適切な丁寧表現を選ぶことなどを指導している。日本人が、丁寧さやぞんざいさを混在させた英語表現を用いて会話する事は、いかに文法上間違いがなくとも、成功するコミュニケーションとしては不利なのである。

本稿は、言語の応用力を身につけるといふ課題をふまえて、外国での行動様式の学習が持つ意味と近年そのアプローチがみせている展開について、ソーシャル・スキルの概念をてがかりに展望する事を目的としている。

1. 行動様式の文化差

異文化においては、それぞれの行動様式が異なるが、それには言語的、非言語的

両方の側面がある。すなわち、あるコミュニケーションは主に言語を通じてなされ、あるコミュニケーションは態度や仕草などで成り立っている。また、言語の前提となる社会的なコンテクストの了解にも違いがある。カルチャーショックと言われるものは、移り住んだ先で新奇な社会のルールに当面して、自分の体系について混乱するといった体験を含んでいる (Oberg, 1960)。彼我の文化差がどのようなかたちをとっているのか、なじみの何を失っているのか、新しい所では何を持っていないのかなどに気づくのである。この事実について、まずいくつかの例を挙げてみたい。

行動様式の言語的な部分としては、例えば表現の意味を解釈するときのさまざまな食い違いが指摘されている。たとえば Brein と David (1971) は、アジア人の「イエス」が「ノー」や「たぶん」を意味することが、西洋人に理解されにくいことを報告している。Triandis (1975) は、アメリカ人とギリシア人之間に見られる食い違いの例を示している。ギリシアで「いつでも来てください」という招待を、アメリカ人は真に受けなかった。本当にいつでもとは思わなかったのであるが、ギリシア人にとっては、日にちを限った招待こそが失礼なのであった。Furnham と Bochner (1986) は、アラブ人はヨーロッパ人よりも大声で話し、アメリカ人はイギリス人よりも大声で話すことを例にとっている。田中 (1991) も、日本人のあいづち的イエスや、日本人の社交辞令的招待が外国人にとって理解しにくいものの一つであることや、アラブ人が日本のレストランで大声を出しすぎるとして注意された事例などをあげている。こうした食い違いが、「言ったはず」「言われた事と違う」「うそをついた」、あるいは「変だ」「おかしい」などと、誤解や不快を生じさせる原因にもなる。

非言語的表現もまた、文化によって付与された意味が異なる。しかし言語以上に、外国へいく前にその表現様式を学ぶ機会はない。高井 (1988) は、これらについて移動前に事前学習することを勧める中で、コミュニケーションギャップの例としてアメリカのニクソン大統領の逸話を引用している。大統領は、メキシコで飛行機をおりるなり、迎えの人々に OK サインを出してひんしゅくをかっした。メキシコでは、親指と人指し指で円を作るのは、地獄に落ちろといった意味であった。Watson (1970) は、ラテンアメリカ人やアラブ人は、ヨーロッパ人より人の目を見つめることを報告している。Argyle (1982) は、ラテンアメリカやアラブや南ヨーロッパを、よく体にふれる文化であるとしている。また日本人は、アメリカではアメリカ人に比べ視線や体の接触をさげがちとみなされる傾向がある (田中, グレフ, 未公開資料)。日本人には、過度の凝視は失礼であり体の接触も日常的ではないためなのだが、それはアメリカ人には、よそよそしさや消極性、親しみのなさを受け取られる可能性がある。こうして、本人が意図しないものを表現してしまうことになる。

社会のルールについての共通理解にも、彼我の差が見られる。Levine と Barlett (1984) は、日本、台湾、インドネシア、イタリア、英国、アメリカの街の時計の正確さをチェックするという方法で、各国の時間に対する観念を比較した。結果として最も正確なのは日本、最も正確でなかったのはインドネシアであったという。ちなみに歩くスピードでも、日本が最も速く、インドネシアが最も遅い。時間に関する約束をしても、その守り方についてセンシティブィティが異なってくる可能性がある。また、アメリカ人は日本人以上に約束を変更可能のものとして見て、変更や確認を行うため、アメリカでは日本人もその流儀を会得する必要がある（田中、グレフ、未公開資料）。暗黙のルールを守る事を一方は期待し、他方は知らないとすれば、互いに当然と解釈している内容が異なることになる。そして、社会的良識に関する過ちを犯す事で、十分な丁寧さや誠実さが無い人物などといった、誤った帰属をまねく可能性がある。

このようにして異文化では、言語の使い方を含め、行動様式そのものが異なっているのである。

2. 異文化におけるソーシャル・スキル・アプローチ

異文化においてソーシャル・スキルを習得することに、いかなる意味があるかをここで考えてみたい。

ソーシャル・スキルは、社会生活において対人関係を維持・発展させるための技能である。たとえば、挨拶、会話の開始、非言語的なサインの読み方、交渉、主張、共感などが取り上げられてきた (Bolton, 1979; Goldstein, 1980)。人とのコミュニケーションにおいて必要となる言語的・非言語的スキルはすべてその対象になりうる。しかしながら、異文化では、その文化独自のこれらの様式は新しく未知である。そして、知人も少なく様子の分からない事も多い。その中で移住者らは何らかの任務や目的をはたし、自分の健康も保って生活をしていかねばならない。そこで例えば、スムーズに会話が始まり、意見の交換が進み、共感を深められ、誤解を避けて理解し合い、問題を解決し、トラブルを防ぐことができるためのスキルがソーシャル・スキルである。その効用は、次のような側面を持っている。

第一に、本人の異文化適応への利益を指摘できよう。コミュニケーション能力が向上すれば、社会的に有能な人間としての自己実現の可能性も増し、社会生活が快適に成功裏に遂行できる (Bolton, 1979; Liebermann ら, 1983)。第二に、異文化における行動習得までの試行錯誤と不快な体験を減らすので、ストレスフルな体験といわれる異文化間移動に際しても、メンタルヘルスがより良好に保たれるといえよう (Fontaine, 1987)。第三に、対人関係が広がる事によって、ソーシャル・サポー

トを得られ、現実的な問題解決に直接に役立つ道具的サポートが得られたり、またサポートのストレスに対する心理的な緩衝作用を期待できる点があげられる (Fontaine, 1987)。第四に、異文化間の不要な誤解をなくす事によって無用な摩擦も減少すると考えられる。不快な事態では原因の帰属が片寄り、相手の悪意に帰着させる事も容易である。しかし、そうした事態におちいることなく、当該社会の考え方や行動の仕方を身につけ実践できるようになった外国人ならば、その社会の真の体験者・理解者として、将来文化間の問題の解決に有効に働いてくれると期待できる。

こうした概念であるソーシャル・スキルが、異文化適応の分野で注目されてきたのは比較的新しい。ソーシャル・スキル及びその訓練は、これまで行動主義的な臨床心理学の治療方法として発達してきた (Hollin and Trower, 1986)。あるいは社会心理学において社会的有能さの理論的な検討素材としてとりあげられてきた (Argyle, 1980, 1986)。

異文化における適応に関しては、精神医学的なカルチャーショックの臨床研究が多いわりには、行動療法の適用が検討されてこなかった(佐野, 1990)。外国へ出向くと言えば外国語の習得は必要とされ、教育を受けることができたが、行動様式は習得する方法がほとんどなかった。その土地へ行ってかわればいい、行かねばわからないし行けば分かるだろう、あるいはそこまで教えられる人はいないなどとも思われてきた。しかしながら、高い言語能力があっても、カルチャーショックを受けて引きこもる人はいた。適応には言葉そのものは一般に考えられているほど決定的要因ではなく、むしろ二次的なものであるとさえいわれる(稲村, 1980)。良好な適応を導くためには、言語のみというよりはコミュニケーションとしての言語を、行動のパターンを含めて学習することが効果的である(近藤, 1981)。カルチャーショックについて優れた統括と先見性を持った者である“Culture Shock”を表した Furnham と Bochner(1986)は、これまでのアプローチを総轄したうえで、ソーシャル・スキルによるアプローチを、カルチャーショックに対する最も直接的で効果的な介入方法であると述べている。それは直接的な問題解決にとどまらず、問題の予防的効果をも持つものであるという。

実際にスキルを学習するにあたっては、必要とされる行動を構造化し、それぞれの行動を、学習理論にのっとった方法で習得させて行く。それがソーシャル・スキル・トレーニングといわれる方法である (Goldstein, 1980)。ここでは、課題を細かく分けたスモールステップ方式、試した行動の適否を判断するフィードバック、自分の行動をチェックしていくセルフ・モニタリング、組になって役割演技を行うロール・プレイ、見本をみて学習していくモデリング、そのほか行動リハーサル、リラ

クセーション、正負の強化子の利用、宿題など、行動理論で有効と考えられてきたさまざまな手法が活用される。時には複数の人を対象にヘルプ・グループを組織する事もある。こういったさまざまな方法をパッケージとして適用しながら、速やかに新しい行動レパトリーを習得して行くよう指導するのである。

Handbook of Skills Training (Hollin and Trower, 1986) では、スキル訓練のさまざまな例があげられている。分裂病者、精神発達遅滞児の社会適応、問題のある少年の指導などのための、ソーシャル・スキル・トレーニングが解説されている。これらは、社会生活を営む上で何らかのスキルの欠落のある人たちを対象に、社会生活に対応できるような技能を身につけさせようとした試みといえるが、スキル訓練は、そうした欠落のある人間への治療的介入にとどまるものではない。たとえば、向社会的行動の訓練を通じて「思いやりのある」人間をはぐくむ事が出来るといった考え方や(菊地, 1988)、スキルのある者を、セルフ・モニタリングの能力のある人間と位置づける考え方もある(堀毛, 1989)。すなわち、なんらかの望ましい行動が考えられる場合に、それを身につけるために、効果的に課題を整理し習得できる方法として、ソーシャル・スキル・トレーニングを活用するのである。

スキル訓練の対象は、主に観察可能な外見的にあきらかな行動であるが、認知的なスキルとして、行動や状況の解釈、感情の処理といった内的なものが扱われる事もある (Goldstein, 1980; Fontaine, 1986)。

3. 異文化における社会的困難

異文化において社会生活をするにあたっては、そこでの対人関係をこなし、その社会のルールに合わせた行動をとることが要求される。移住者らがどのような場面で困難を覚えるのかを調べる事は、いかなる場面における行動様式の習得が必要かを示してくれる。スキル研究に先立つ研究系譜として、いくつかの例をあげてみたい。

Furnham と Bochner (1982) は、異文化においてソーシャル・スキルを必要とする状況を特定するという明瞭な目的意識を持って、英国内の外国人学生150人が困難と感じる社会的状況は何かを調査した。彼らは、困難が予想される社会的状況(同年代の友人を作る、大きなスーパーマーケットで買い物をするなど)が述べられた、40項目からなる Social situation Questionnaire を用いた。各項目に対し、心配、不快、恐れなどの感情を持つ程度を基準に、「経験なし」「まったく困難ではない」「少し困難」「まあまあ困難」「かなり困難」「非常に困難」の6つから、一つを選んで評定させた。因子分析の結果、6つの因子が見いだされ、含まれる項目は以下の通りであった。右肩の小さな数字は、うち最も困難とされた10項目の順位を示している。

①儀礼的關係・注意の集中：聴取の面前に出る（スピーチなど）⁴，目上の人とつきあう，小グループのリーダーになる，医者に行く，部下をしかる，正式の晩餐に出る，インタビューに応じる，人々を深く知る⁵，公の場所で文句を言う¹⁰，②親しい関係を作る：冗談やユーモアや皮肉を理解する⁶，会話の主導権を取る⁸，他人に近づく－友人関係の開始³，同年代の英国人の友人を作る¹，③公的儀式：列に並んで待つ，外や個人のトイレを使う，④対人接触の開始・紹介：人でいっぱいの中に入る，知らない人に会って紹介される，ディスコやダンスに行く，よく知らない人と一緒にいる⁹，パブに行く，⑤公的場面での意志決定：大きなスーパーマーケットで買い物をする，公共交通機関を利用する（電車，バス，地下鉄），他人に関わる決断を下す，⑥主張性：レストランやカフェに行く，自分を見つめている人に対応する⁷，怒りっぽくて攻撃的な人とつきあう²。

困難度の高い10項目には対人関係に関するものが並び，人間関係の構築・維持に困難が大きいことが示唆される。また，困難度の評定には，①出身文化圏による差（文化の類似度），②個人差（適応力，性格），③異文化体験による差（過去の経験，準備）が見られたという。例えば，類似の文化から来たもの，適応力のあるもの，過去に異文化を体験しているものの困難度はより低い。

山本ら（1986）は，アメリカにおける日本人留学生48人の社会的困難について，Furnham（1983）の質問紙から留学生活に関する21項目を抜き出して調べた。その結果次の4因子が抽出された。①社交：同年齢のグループの中にはいる，同年齢の友人を作る，パーティーに出席するなど，②公共場面：公共輸送機関に乗るなど，③交渉：意に満たないサービスに不平を言う，先輩（年上の人）にわびをいうなど，④接待：グループよりもむしろ一人の人と一緒にいる，自分の部屋で人々を歓待するなど。パーティーや個人の部屋への招待などは，日本よりもアメリカで重視される項目であろう。こうした行動は日本では習得のチャンスがなかったにも関わらず，現地では必要度が高く，困難と感じられるであろう。

佐野（1990）は，日本における外国人留学生50人の困難度を，やはり Furnham ら（1982）の質問紙を改良して調べた。彼は，項目を20項目のみに絞り，「やさしい」から「大変に難しい」までの7段階で評定させた。困難の10位までは，以下の通りである。①人を深く知る，②大勢の前で話す，③目上の人と話す，④不満である事を人に伝える，⑤ユーモアや皮肉を理解する，⑥自分と考えの違う人と話す，⑦礼儀正しく行動する，⑧医者と話す，⑨指導教官と話す，⑩自分の意見を人に伝える。ちなみに11位から15位までの項目は，会話を楽しむ，アルバイトの職のために面接を受ける，アパートや下宿の隣人と話す，学内で事務の人と話す，別れの挨拶をするなどであった。また，困難度の比較的低い16位から20位までの項目は，同じ世代

の友人を作る、大家さんと話す、人と約束して出かける、交通機関（電車・バス）を使う、スーパーマーケットで買い物をするなどであった。

ついで項目相関を手がかりに、内容を以下の4つの場面に分類したところ、次の順に困難度が高かった。①正式場面：大勢の人・目上の人と話す、アルバイトの面接、②自己主張：意見・不満を伝える、考えの違う人と話す、③友人関係：友人づくり、人を深く知る、会話を楽しむ、④日常生活：買い物、学校の事務の人や大家さんとの会話。また、自己主張や友人関係の困難が高いと、心理的安定度・勉強意欲・日本生活の満足度を総合した日本への適応度が低いという関係があった。対人関係の構築能力は、留學生活の正否にも関わる要因であることを示唆している。

山本ら（1986）は質的データの分類にKJ法を用いていたが、日本における留學生の困難について記述されたものをKJ法で分類し、かつ留學生の属性によって見いだされる傾向を確認した試みがある（田中，1991；田中・藤原，未公刊資料）。ここでは、状況の特定にとどまらず、外国人に混乱をもたらす日本的なコミュニケーションとは何をさすのかについて、具体的な項目が挙げられ分類されている。たとえば日本人の表現の間接性として、何かを断る場合にはノーのかわりに「難しい」とか「考えておく」とかいった表現を使うことなどである。6つの領域としてあげられているのは、①間接性：直接性の回避、主張性の弱さ、細やかさ、事実と言う事の違い、調和の尊重、②社会通念：挨拶、社交、儒教的上下関係、社交辞令、義理、規則遵守、③開放性：おおらかな表現のなさ、つつましい自己表現、楽しみのなさ、禁欲的まじめさ、慎重な人づきあい、④異性：消極性、開放度、対女性文化、⑤外国人：回避、不慣れ、英語圏への注目過多、⑥集団：同調、同質さへの配慮、などである。

こうした試みによって、行動のモジュールが設定され、ロールプレイの課題の手がかりが得られると考えられる。こうした研究は、留學生に対するソーシャル・スキル・トレーニング・アプローチを現実化していく途中にあると位置づけられよう。

4. 異文化におけるソーシャル・スキル・トレーニングの適用

ソーシャル・スキルという概念を用いなくとも、たとえばCulture Learning (Bochner, 1981, 1982), Cross-cultural Training (Bennett, 1986; Triandis, Brislin and Hui, 1988)といった名称で、類似の効果を求めた試みがある。学習論にもとづいて行動に焦点化したものではないが、その文化の考え方を知り、オリエンテーション等で具体的な生活の方法などを学ぶことが重要とされている。ここにソーシャル・スキルの訓練を導入する事も可能であろう。

事実上スキルを指導して成功した例としては、Collett (1971) の、英国人にアラ

ブのスキルを学ばせた報告がある。アラブではよく目を合わせる事、人との空間的距離を近くすること、対話中はより相手の体にふれる事、よく微笑し握手することなどの非言語的行動をとりあげた。これらを訓練した群としなかった対象群とでは、アラブ人によるソシオメトリックテストで明かな差があった。すなわちスキルを会得した英国人のほうが、アラブ人からの評価が高かったのである。また、アメリカにおける日本人学生のソーシャル・スキルを選定し訓練を試行したものでは、実に15領域67項目にも及ぶスキル・リストがあげられている（田中・グレフ、未公刊資料）。有意義なスキルを全て訓練するためには、必要なスキルのアセスメントを含めて、体系的に取り組む必要がある。

スキル・トレーニングのありかたの提案として、Fontaine (1986) は、次のような意見を述べている。社会的な技能 (skill) あるいは有能 (competence) とは、効果的な方略を用いることができ、十分に課題が遂行でき、環境と適切に関われる事を意味する。従ってスキル・トレーニング・プログラムは、ソーシャル・サポート・システムの発達と維持に効果を持つ。ソーシャル・サポートは、メンタルヘルスの維持に役立つものとして、異文化における適応に重要な役割を果たすと考えられる。スキルは、汎文化的なものや特定の文化におけるものがあり、それらを組み合わせることで新環境におけるサポート形成を促進するプログラムが提案できる。そのプログラムの内容は、以下の7つの段階から構成されている。①ソーシャル・サポートに対するニーズの同定：自分は何が必要か、②可能なソーシャル・サポート・システムの同定：そこではどんなサポートが可能か、③可能なソーシャル・サポート・システムと個人的ニーズを合致させる：どれが自分の役に立つか、④接触を行う：「こんにちは」の声を掛ける、⑤自分の空間の形成 (quick personalization)：自信を持つ・楽にする (feeling at home) (外界の変化にかかわらず、自分が居心地よく感じられるようにする)、⑥社会システムの理解：そのシステムをその人とともに維持する、⑦再入国・隔離に関するスキル：帰国に対応する (帰国後の本国でのサポート・グループの再構成など)。なお、4番目にある接触の開始においては、行動的技法 (behavioral strategy) が必要であり、サポートの充足度の評価もともに実施される必要があるという。訓練にあたって考慮すべき状況変数としては、宿題の性質 (インパクトの大きさの考慮など)、本人の既婚・独身、民族、性別などの要因をあげている。上述の Fontaine のプランは、認知的スキルと行動的スキルを組み合わせているが、その行動変容の焦点は、対人接触の開始と発展にある。

Furnham と Bochner (1982) は、比較的早くから異文化における対人関係のスキルに注目している。彼らは、異文化における社会的有能性 (cross-cultural competence) を養うためにはソーシャル・スキルが必要で、それは訓練が可能だと述べて

いる。彼らによると、個人対個人の出会いが不成功に終わるときには、次の4つの食い違いがある。①個人のめざすものが状況にそぐわない、②相手の行動の意味を掴み損っている、③相手の行動やメッセージが誤って媒介されていたり、帰属を間違ったりしている、④適切な反応方法を知らない、不適切な方法で反応している。従って、例えば態度や感情の表出、身ぶり、態度の意味の理解、挨拶、自己開示、要求の仕方や断り方などの儀式化されたルーチン、自己主張などを訓練して身につければ、対人関係を成功に導くのに効果的である。そして、異文化においては、その文化内でのこれらのパタンを身につけることが必要なのである。

彼らが訓練可能と考えるスキルの範囲は、次の7つである。①知覚するスキル (perceptive skill)：適切な応対を調整する (相手を励ますなど)、②表現のスキル：声の大きさやトーンなど、③会話のスキル：話題、自己開示、話者の交代など、④主張性：自分の権利のために主張する、⑤感情表現：適切な感情の表出、⑥不安のマネジメント：ストレス対処など、⑦親密さのスキル (affiliative skill)：暖かさ、セクシュアリティの表現など。こうした事を身につけ実施することで、受け入れ国側の友人が増え、一員となっている感じ (membership) が得られて滞在の質が向上し、得られた友人がいつそうのスキル習得を促進して、いわゆる bicultural bond を促進する。

つまり、対人関係にともなうスキルはさまざまにリストアップできるが、それらは同定及び訓練が可能で、ネットワークの発達や海外滞在の適応促進や体験の質の向上、ストレス軽減、カルチャーショックの対策や防止など、さまざまな効果を波及させる可能性を持っているといえよう。

5. 今後の課題

日本における適応研究は、まだ圧倒的に数が少なく、留学生の日本における適応を促進するために知るべき事は多い(高井, 1989)。スキル研究としては、まず、日本で必要なスキルは何かを知る事が必要である。そのためには、経験される困難や、日本的と認知される行動様式について、記述や面接、質問紙などを用いた調査結果が蓄積される必要がある。それは、内容を選び出し整理する質的研究から、構造を確認し階層を整理する数量的解析を経て発展していくものであろう。訓練形式については、試行を重ねてより良いパッケージとし、スキルの役割についてはコミュニケーションやメンタルヘルスに関する役割や機能をとらえ、モデルを成形していくプロセスが必要になるだろう。

こうした観点に立って、ソーシャル・スキルによる異文化適応へのアプローチが持つ、今後の具体的課題を以下に述べる。

異文化の適応困難に関する問題は、どこの国からどこの国への適応であるか、どんな立場の移動かなどによって多くの組み合わせが考えられる。それらの中には共通の部分もあれば独特の部分もあろう。まずは特定の文化間におけるスキルの特定が必要であり、このことは国の組み合わせによって、かなりの量の研究が必要であることを意味する。

スキルの評定方法については、Bellack は1979年にレビューを著し、臨床面接、セルフ・リポート、セルフ・モニタリング、行動観察など、さまざまな方法をまとめている。最近ではさらにビデオを用いたり (Blumer and McNamara, 1985)、面接による評定をすすめる (Riggio and Throckmorton, 1988) など、開発が著しい。しかし例えば、精神遅滞のスキルについて Matson, Helsel, Bellack と Sanatore (1983) の質問紙を後の研究者も活用するといったような、一定の異文化のスキル尺度はまだない。訓練に先立ち、臨床分野において skill deficiency と呼ばれるような、スキルの欠落状態を評定する方法が必要である事を考えれば、その開発が望まれる。

スキル・トレーニングのプログラムは、個人個人に合わせてあつらえたものである場合に、最も効果を発揮すると考えられる (Fontaine, 1986)。今は、プログラムの組み立てや実施についてはトレーナーにまかされているが、訓練分野に合わせた適切な訓練方法についての知見が集積されることが望ましい。例えばトレーナーにはネイティブやその文化の体験者を用いること、出身文化圏や個人特性によってサブグループを構成するなどが考えられよう。

スキルの獲得が異文化適応にどのような影響を持つかについては、いくつかの視点と尺度で実証的に調べる必要がある。サポート形成、問題解決、メンタルヘルス、留學生活の評価などいくつかの視点が考えられよう。それはスキルの位置づけを明らかにし、あるいは異文化適応に関するモデルを進んだものにしていくためには、必要なことである。

適応とは、当該社会において心理的問題を生じず、良好な達成を遂げ、そして良質の体験をすることと考えられる。そのためには、スキルが身につく、有効に活用されている事が不可欠であり、快適で良質の体験はソーシャル・ネットワークの発達を伴っていると思われる。その意味でスキルとサポートの視点は有効なアプローチであろう。しかし、語学能力の育成を側面から支えるものとしても、言語的・非言語的なスキルの訓練が活用されていく事が望ましいだろう。ロールプレイの素材として、特に難しい典型的な場面を取り上げて会話訓練に用いれば、学生にとっては効果的な語学学習であろう。日本において言語の応用能力を身につけ、良好なコミュニケーションを築いて適応をはたす学生を育成するための教育的試みについて

の、今後の展開が期待される。

本研究の一部は、1990年度前期松下国際財団研究助成(「アジア系留学生の異文化適応促進のためのソーシャル・スキル・トレーニング」代表・藤原武弘)によって行われた。

引用文献

Argyle,M. 1980 Interaction skills and social behavior as a function of the situation. In G. P. Ginsburg (Ed.) *The Social Psychology of Psychological Problems*. Chichester : Wiley

Argyle,M. 1982 Intercultural-communication. In Bochner,S. (Ed.) *Cultures in Contact : Studies in Cross-cultural Interaction*. Oxford : Pergamon Press

Argyle,M. 1986 Social skills and the analysis of situations and conversation. In Hollin,C. and Trower,P. (Eds.) *Handbook of Social Skills Training*. Oxford : Pergamon Press

Bennett, J.M. 1986 Modes of cross-cultural training : Conceptualizing cross-cultural training as education. *International Journal of Intercultural Relations*, 10, 117-134

Blumer,C.H. and McNamara,J.R. 1985 Preparatory procedures for videotaped feedback to improve social skills. *Psychological Reports*, 57, 549-550

Bochner,S. (Eds.) 1981 *The Mediating Person : Bridges between Cultures*, Cambridge : Mass.,Schenkman

Bochner,S. 1982 The social psychology of cross-cultural relations, In Bochner,S. (ed.) *Cultures in Contact : Studies in Cross-cultural Interaction*. Oxford : Pergamon Press

Bolton,R. 1979 *People Skills : How to assert yourself, listen to others, and resolve conflicts*. New York : Simon & Schuster, Inc.

Brein,M. and David,K.H 1971 Intercultural communication and the adjustment of sojourner. *Psychological Bulletin*, 76, 215-230

Collett,P. 1971 Training Englishmen in the non-verbal behaviour of Arabs : An experiment on intercultural communication. *International Journal of Psychology*, 6, 209-215

菊地章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店

Fontaine,F. 1986 Rolls of social support systems in overseas relocation : Implications for intercultural training. *International Journal of Intercultural*

Relations, 10, 361-378

Furnham, A. and Bochner, S. 1986 *Culture shock*. Oxford : Methuen Inc.

Furnham, A. and Bochner, S. 1982 Social difficulty in a foreign culture : an empirical analysis of culture shock. In Bochner, S. (Ed.) *Cultures in Contact*. Oxford : Pergamon Press

Goldstein, A.P., Sprafkin, R.P., Gershaw, N.J. and Klein, P. 1980 *Skillstreaming for Adolescents*. Champaign, IL : Research Press

Gudykunst, W.B., Hammer, M.R. and Wiseman, R.L. 1977 An analysis of an integrated approach to cross-cultural training. *International Journal of Intercultural Relations*, 1, 99-110

堀毛一也 1987 自己モニタリングの概念および尺度に関する検討 東北福祉大学福祉心理学論集 3, 185-199

Hollin, C.L. and Trower, P. (Eds.) 1986 *Handbook of Social Skills Training : Clinical applications and new directions*. Oxford : Pergamon Press

稲村博 1980 日本人の海外不適應 日本放送出版協会

近藤裕 1981 カルチュア・ショックの心理：異文化とつきあうために 創元社

LeVine, R. and Barlett, K. 1984 Pace of life, punctuality and coronary heart disease in six countries. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 15, 233-255

Lieberman, R.P., Jacobs, H., Boone, S., Foy, D., Donahoe, C.P., Falloon, I.R.H., Blackwell, G. and Wallece, C.J. (中込和幸, 福田正人, 平松謙一, 丹波真一訳) 分裂病患者の社会適應のための技能訓練 精神医学 30 (2), 229-239

Matson, J.L., Hessel, W.J., Bellack, A.S. and Senaeore, V. 1983 Development of a rating scale to assess social skill deficits in mentally retarded adults. *Applied Research in Mental Retardation*, 4, 339-407

Oberg, K. 1960 Cultural shock : adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*, 7, 177-182

Riggio, R.E. and Throckmorton, B. 1988 The relative effects of verbal and nonverbal behavior, appearance, and social skills on evaluations made in hiring interviews. *Journal of Applied Psychology*, 18 (4), 331-348

佐野秀樹 1990 異文化社会への適應困難度に関する研究—社会場面に関する分析—行動療法研究 16 (1), 37-44

白土悟 1987 留学生適應の諸問題 教育と医学 34 (10), 80-86

高井次郎 1989 在日外国人留学生の適應研究の総括 名古屋大学教育学部紀要：教育心理学科 36, 139-147

高井次郎 1990 異文化間コミュニケーションの基礎スキル 外国人留学生問題研究会(編) 留学生と異文化間コミュニケーション 凡人社

田中共子 1991 在日留学生の文化的適応のためのソーシャル・スキルの検討 異文化間教育 5 (印刷中)

田中共子, フローレンス・W・グレイ アジア人学生のためのアメリカン・ソーシャル・スキル・トレーニング (未公刊資料)

田中共子, 藤原武弘 留学生の日本における社会的困難 (未公刊資料)

Triandis, H.C. 1975 Culture training, cognitive complexity and interpersonal attitudes. In Brislin, R.W., Bochner, S. and Lonner, W.J. (Eds.) *Cross-cultural Perspectives on Learning*. New York : Wiley

Triandis, H.C., Brislin, R. and Hui, C.H. 1988 Cross-cultural training across the individualism-collectivism divide. *International Journal of Intercultural Relations*, 12, 269-289

鶴田庸子, ポール・ロシター, ティム・クルトン 1988 英語のソーシャル・スキル 大修館書店

Watson, O.M. 1970 *Proxemic Behavior : A Cross-cultural Study*. The Hague, mouton.

山本多喜司(代表) 1986 異文化環境への適応に関する環境心理学的研究 昭和60年度科学研究費補助金研究成果報告書